

なくせ！原発・核燃三八地区集会連帯メッセージ

青森県保険医協会 会長

青森県社会保障推進協議会 会長

3.11 さようなら原発/核燃青森県民集会実行委員会 実行委員長

大竹 進

なくせ！原発・核燃 三八地区集会参加の皆さん

青森市で開催されている「さようなら原発、さようなら核燃青森県民集会」から連帯のメッセージを届けます。

3.11から1年が経過しましたが、震災、津波でなくなられた方のご冥福をお祈り申しあげます。また、被災され、現在も不自由な生活を送られている被災者の皆さまに改めてお見舞い申し上げます。

福島での原発事故は日本の歴史、人類の歴史を変えました。今までの技術がいかに未熟なものであるかを証明し「安全神話」も一瞬にして崩壊しました。残された私たちができること、それは、青森県の原発と核燃サイクルを止めることはもちろんですが、全ての施設を青森県から撤去することです。核施設の撤去の技術は未だに確立されていません。そのために、多くの人が集まって知恵もお金も出し合い、困難な道を切り開いて行く必要があります。

放射能、核の問題は、選挙権を持っている大人だけで決めることは間違いです。子どもたちも放射能について学び、悩みながら、自分たちの主張をしています。子どもの叫びに耳を傾け、経済よりも子どもの未来を守る選択をすることが大人の責務です。そして、子どもたちが原発・核燃問題に関心を持ち、子どもたちのものさしで判断し、もっと大きな声を上げることを歓迎しています。

放射能汚染に苦しむ福島県民と連帯し、
さようなら原発、さようなら核燃の新しい一步を、
青森市と一緒に八戸市からも踏み出しましょう。

子どもチームからのメッセージ

私たちは福島市で子育てする親たちで集まって、福島で子育てする人も、県外に避難して子育てする人も悲しい思いをしないように、子どもたちを放射能被害から守るために活動しています。

昨年9月からはじめた「ふくしまの子どもたちを放射能被害から守るための署名」は福島県内だけじゃなく全国のみなさんが集めてくださって、2月24日現在121,877筆集まり、福島からバス4台100人で国会に行き行って提出してきました。ご協力いただいた全国のみなさんに本当に励まされています。ありがとうございます。

大震災・原発事故から1年になります。この間、ふくしま復興共同センターや子どもチームのみんなと、「なくせ原発10・30大集会」を1万人の参加で成功させたり、新婦人が県議会に提出した「県内すべての原発の廃炉を求める請願」を採択させて“オール福島”の流れをつくったり、「ふくしまの子どもたちを放射能被害から守るための署名」を集めて細野原発担当大臣に直接うったえたり。運動しながら少しずつ希望をつないで福島でくらししてきました。

しかし、ふくしまの子どもたちは今もお、外で思いっきり遊んだり、運動したりできない異常な環境の中で生活をしています。放射能の影響も心配ですが、体力の低下や発育への影響も心配しています。

子どもチームのメンバーの子どもたちが通っている保育園や学校の中だけでも、幼児は食欲が落ちて体重が増えない、逆に小学生は肥満度がアップしている、など異変を感じています。実際、郡山市の小児科医が調査したところ幼稚園児の体重が前年より増えていないという報道もありました。

この間、国や県や福島市と懇談して、子どもの発育状況などを把握して、対策をとるよう求めてきました。

こうした状況の中、昨年11月、野田首相が「福島の18歳以下の医療費無料化」を前向きに取り組む意向をしめしたというニュースは「やっと国も動いてくれるんだ」と少し希望が見えた気がしました。それなのに「収束宣言」のあげく医療費無料化も見送られてしまって絶望的な気持ちになりました。

見送った理由が「風邪や骨折まで原発事故と結びつけて国が医療費を支払うことは難しいと判断した」ということでしたが、1年近く外で思いっきり遊ぶことや運動することを制限されて、体力も免疫力も低下しています。ケガをしやすくなったり、風邪をひきやすくなったり、原発事故と関係ないとは言わせません。低線量被ばくの影響はハッキリしなくても、1年間屋内に閉じ込められたことによる影響はハッキリしています。

福島県が10月から独自に実施することになりそうですが、財源が限られています。子ども署名の要望項目はどれも切実ですが、まずは「18歳以下の医療費の無料化」を原発を推進してきた国が責任をもってやるべきです。

「なくせ！原発」「なくせ核燃！」安心して住み続けられる福島を！日本を！
ごいっしょに力をあわせていきましょう。

2012年3月11日 ふくしま復興共同センター放射能対策子どもチーム・村上裕美